

プラネタリウム番組

アルマ

～ボクのみつけた願いごと～

登場人物

アルマ…斎賀みつき	お父さん/新郎…高口公介	友達(男の子)/リンゴの女性…内藤有海
ミラ…古城門志帆	お母さん/ロケットの少年…小平有希	友達(女の子)/新婦…小橋知子



アルマ キミは星に何をお願いする？

アルマ ボクは人を幸せにするために生まれたロボット。

キミたちはロボットのボクでも一緒に遊んでくれるかな…？

タイトルIN

【 アルマ ～ボクのみつけた願いごと～ 】

アルマ この町には、ボクみたいなロボットがたくさんいる。

一緒に働いたり、助けたりするのがボクたちのお仕事。
今では一つの家族とロボットと一緒に住んでいる。

ボクの住んでいる家には、パパとママと小さな女の子、
ミフと一緒に暮らしてる。

ミフ 「ごちそうさま！」

お星さまの部屋でアルマと遊んでいいでしょう？」

ママ 「部屋のお片づけは終わったの？」

ミフ 「うん！」

ママ 「あら、えらいわねー。」

ミフ 「えへへ、だってアルマと一緒に遊びたいもん！」

パパ 「そうか、えらいえらい。」

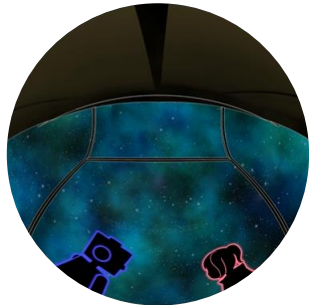
ミフ 「アルマ、行こう？」

アルマ 「うん。ミフ、何してあそぶ？」

「えーっとね、おしゃべりして、お絵かきして…
本も読みたいな。あとね…」

声F・O

アルマ ボクらはとっても仲良しなんだ。



ミラ 「ねえ、アルマ。もうすぐ素敵な日が来るって覚えてる？」
アルマ 「素敵な日？」

ミラ 「うん！『星の降る夜』が今年も来るんだって。

ほら・・・1年でいちばん流れ星が降ってくる夜だよ。」

アルマ 「思い出した。去年は雨で、ミラ泣いてた。」

ミラ 「もー！言わないで！今年は大丈夫だといいなあ。

ママが遅くまで起きててもいいよって言ってくれたから、

お星さま、一緒に数えようね。」

アルマ 「お星さま、たくさん降ってくる？・・・6個くらい？」

ミラ 「うーん、わかんない。

でも多分、私とアルマの指の数よりたくさんだよ。」

アルマ 「そんなに！？大変だ、空からお星さまが無くなっちゃう？」

ミラ 「あはは、大丈夫だよ。お星さまはすぐくすぐくすぐーく沢山

あるって絵本に描いてあったもん。」

アルマ 「そっかー、良かった！

あ、ミラ、それまでお願い事考えなくちゃ。」

ミラ 「そうだったね！」

2人 「空を流れるお星さまに願い事をする、その願い事は叶う！」

ミラ 「去年パパに教えてもらったね。」

アルマ 「教えてもらった。」

ミラ 「楽しみだね！」

アルマ 「楽しみ！・・・って何？それも“ころ”？」

ミラ 「うん、心だよ！えーっとね・・・こんな感じ！」

アルマ 「楽しみは・・・ころ？」

ミラ 「そう！ 楽しみー！」

アルマ 「楽しみー楽しみー！」

アルマ ミラは学校というところで勉強したことを、

ボクにも教えてくれる。

文字や数字、歌や体操。そういうのは覚えられるけど、
覚えるのが難しいのもある。

それは“ころ”っていうもの。

人の持つ“かんじょう”がよく分からない。



ママ 「ミフー、お友達が来てくれたわよ？」
ミフ 「はいー！」

友達1 「ミフ、『星の降る夜』にかざる星、一緒に作ろうぜ。」

友達2 「いっぱい作って、みんなで交換するの。」

ミフ 「わー、楽しそう！」

友達2 「ママがね、作り方を教えてくれるって。私の家に行こう？」

ミフ 「うん！ それじゃアルマ、行ってくるね！」

アルマ 「あっ・・・。」

ミフ 「なあに？アルマ。」

アルマ 「えっと・・・。」

友達1 「また、アルマはだんまりだよ。いいじゃん、行こうぜ！」

アルマは留守番な！

アルマ 「・・・。」

友達2 「ミフちゃん行こう？」

ミフ 「う・・・うん。」

アルマ 「あっ・・・！」

行っちゃった・・・。

ボクも一緒に行きたかったな・・・。

アルマ 「そうだ！ボクのお願い事『みんなと遊びたい』にしよう。

でも・・・お星さま、

ロボットのお願いでも、叶えてくれるかな。

ボクが“ヒト”だったら・・・。」

ミフ 『見てアルマ、可愛いでしょう！嬉しいなあー！』

アルマ 『ウサギのぬいぐるみ？ これがミフの“嬉しい”？』

ミフ 『そうだよ。パパとママからのお誕生日プレゼント！』

アルマ 「あの時、ミフはウサギのぬいぐるみが“嬉しい”って言った。

ぬいぐるみも、人にとっては“こころ”なのかな・・・。

モノを沢山持っているから、“こころ”も沢山ある・・・、

そうか、ボクも“こころ”を集めたら人になれるかも！』



アルマ「どこに行ったら、^{ここ}を分けてもらえるかな・・・」

アルマ「うわー、高い建物。」

アルマ「おさかなさんこんにちは。」

君たちは^{ここ}って知ってる？
・・・そっか、知らないか。」

アルマ「あそこ、なんだろう?」

アルマ「こんにちはは、ボクはアルマ。これは何をしてるの?」

新婦「私たちは今日結婚式を挙げたの。」

アルマ「結婚?それはなに?」

新婦「そうね、愛しい人とずっと一緒にいる約束をする日よ。」

アルマ「愛しい」はボク分らない・・・。」

新郎「そっだなあ・・・大好きよりも、もっと大きな気持ちかな。」

アルマ「大好きよりも、もっと大きな気持ち。」

ねえ、その“愛しい”気持ちを分けてくれないかな。

“ここ”は大切なものに入ってるみたいなんだ。

お姉さんが持つてる、そのレースの手袋に、

“愛しい心”が入ってないかな?」

新婦「ふふ、そうね。」

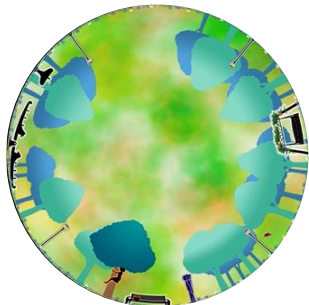
新郎「確かに、二人の愛しい気持ちが入っているかもしれないね。」

新婦「いいわ、この手袋をアルマにあげる。」

アルマ「これが愛しい気持ち・・・ありがとう。」

アルマ「さようなら!」

アルマ あといくつ心があったらボクは・・・



女性 「いやー！ 来ないでーっ！

なんで来るのよー！ほら、あっち行つてば！」

アルマ 「こんにちは、どうしたの？」

女性 「ロボットさん！

お願いっ、そのカエルを遠くにやって頂戴。」

アルマ 「カエル？」

カエル 「ゲコーーーーーー！」

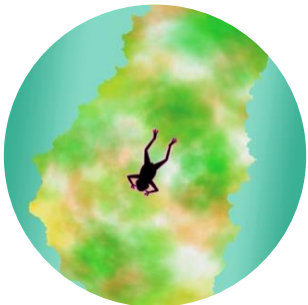
女性 「いやーっ！」

アルマ 「カエル、嫌い？」

女性 「昔から声とか形とか怖いのよー！」

アルマ 「怖い？怖いと思うのは心？それならコレ、もらていい？」

女性 「何でもいいから見えないところに連れてってー！」



アルマ 「もう、見えないよ。」

女性 「・・・ふう・・・助かったわ。ありがとう。」

アルマ 「ボクも”怖い心”ありがとう。」

女性 「良く分からないけど、どういたしまして？」

そうだね、お礼にこれをあげる。

さっき買ったばかりのりんごよ。とっても美味しいの。」

アルマ 「美味しい心”だね？ありがとう。2つも心をもらえた！」

女性 「それじゃあね、ロボットさん。助けてくれて本当に有難う」

アルマ 「さようなら！」

アルマ 怖い心と美味しい心、

ボクもだんだん”ビト”に近づいてきたかな。

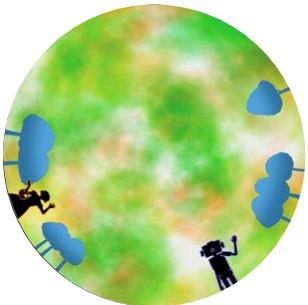
それから、ボクは色々な心をもらった。

優しい心、悲しい心、恥ずかしい心、面白い心・・・。

こんなに沢山の”こころ”が集まった。

これで、ボクはお願いを叶えてもらえる。

そろそろ家に帰ろう。



SE トンカチの音

アルマ「とんとん、カチカチ、とんかちかち、
何の音だろう・・・？」

アルマ「こんにちは、ボクはアルマ。君は何をしているの？」

少年「やあアルマ。これはロケットを作ってるんだ。」

アルマ「ロケット？ ロケットを作ってるの？」

少年「そんなの決まってるじゃないか。これで宇宙へ行くんだ。」

アルマ「宇宙に行って、どうするの？」

少年「質問ばかりだなあ、アルマは。まあいいけど。

あんな、こうやって自分で作ったロケットで宇宙に出て、
色んな星をまわるんだ。でもまずは、月に行く！

それが俺の夢なんだ！」

アルマ「すごい！すごい！」

少年「へへっ。」

アルマ「自分で作ったロケットで、宇宙に出て、月へ行く。

それが君の夢。

それなら、“星の降る夜”にお願いをすると

きつとお星さまが、願いを叶えてくれる。」

少年「そうだな、でも・・・これは自分で叶えたいから、

星にも願うけど、自分でも頑張るよ！

それが夢ってやつさ！

それで、アルマは何をしてるんだ？」

アルマ「ボクは“こころ”をあつめてるんだ。」

少年「心を？」

アルマ「うん、願いを叶えてもらうには“ヒト”にならないと。」

少年「へー・・・、ロケットって人になれるんだ。」

アルマ「えっ・・・？」

少年「・・・あれ？どうした？どこか壊れたか？」

アルマ「ううん、こわれてない。」

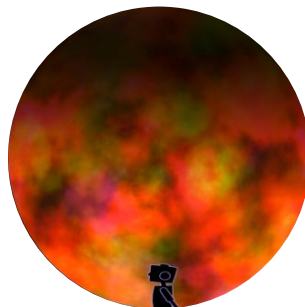
少年「それならいいけど。

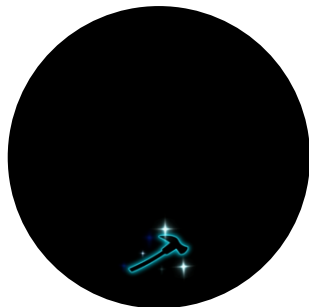
そうだ、このトンカチあげるから元気出せって。」

アルマ「これはどんな気持ち？」

少年「この気持ち？ そうだなあ・・・ロケット作っていると

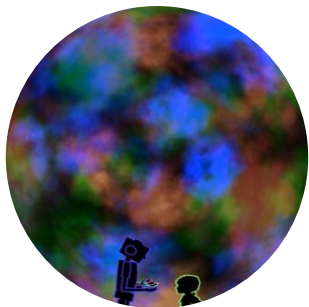
ワクワクしてくるから・・・“楽しい”かな。」





アルマ「楽しい？ボク、＼楽しみ＼は知ってる。」「うでじゅっ？」
少年「あはは。なんだ、それ。でもまあ、そんな感じかな。」

アルマ「本当にもらっていいの？」
少年「もう1つあるし、いいよ。アルマの夢、叶うといいな。」
アルマ「・・・うん、ありがとう。」



友達1「あ！ アルマ！
どこに行ってたんだよ。ミラがすげー探してたんだぞ？」
アルマ「ボク、＼こころ＼を集めてたんだ。」
友達1「心を？」

アルマ「ほら見て、こんなにたくさん。
みんなが、大事な心を分けてくれた。
ボクはこれで＼ビト＼になってお願いを叶えてもらっんだ。」

友達1「なんだそれ？ものを集めても、
□ボットが人になれるわけじゃないじゃん？」

アルマ「えっ・・・！？」

友達1「それに、心って集めるものじゃなくね？」

でもこのカエルとかいいなー。」

アルマ「・・・□ボットは、＼ビト＼になれないんだ・・・。」

友達1「お？全部くれんのか？」

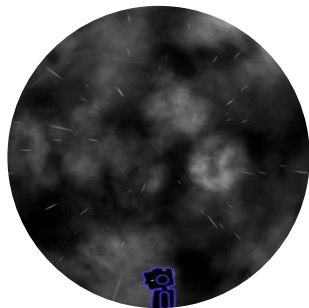
アルマー？

どこに行くんだよ！

もう夜になるから、皆心配するぞ？

アルマー？」

(声次第に遠く)



アルマ「あれは“こころ”じゃなくてただの“もの”。
それなら、“こころ”はどうしたら出来るんだろう？」

アルマ「雨だ……。」

アルマ「はやく家に帰らないと、みんな、心配する。
でも……。」

アルマ「あの時、ミラ、“困った”の顔してた……。」

アルマ「ボクはどうしたらいいんだろう……。」

アルマ「……あれ？」

アルマ「うわぁ……。空がきらきらしてる。」

あつ、星が！ そうだ、“星の降る夜”だった！
ヒトになれてないけど……お願い事聞いてくれるかな……
お星さま、ボクみんなと一緒に遊びたい……。」

アルマ「そういえば……。」

少年「『でも……これは自分で叶えたいから、
星にも願うけど、自分でも頑張るよ！
それが夢ってやつさ！』」

アルマ「ボク、一緒に遊びたい、友達になりたいって、
ちゃんと言ってない……。まだ自分で頑張って無かった。」



ミラ 「アルマー！アルマー！」
アルマ 「ミラの声？」

ミラ 「よかった！本当にいた！すごく心配したんだよ。」
アルマ 「ごめんなさい。」
ミラ 「ううん、私もごめんなさい。」
アルマ 「どうしてミラがあやまるの？」

ミラ 「だって、アルマも大切な友達なのに、
2人にみんなで遊ぼう、
みんなで作ろうって言えなかった・・・。」

アルマ 「ミラ・・・。あのね、ボク・・・あつ！」
ミラ 「あつ！」

ミラ 「(広がる青い花を見て) あれ・・・？
うわぁ・・・すごい、すごいよアルマ！お花がきれい！」

アルマ 「きれい・・・うん、きれい。」
これが「きれい」って思う心。(独白のように)

2人 「うわー！」

アルマ 「街でね、たくさんの人と会ったよ。
優しい人や怖がりな人、がんばり屋な人、面白い人、
・・・みんなが「ころ」を分けてくれた。
あとね、大切なことも教えてもらった。
お願いするだけじゃなくて、自分でも頑張るってこと。
ボクね、みんなと一緒に遊びたい、友達になりたいって、
ちゃんと言いたい！」

ミラ 「うん！アルマも一緒に遊べたら素敵だね。
私も、みんなで遊ぼう！ってちゃんと言う！」
アルマ 「ミラ！」



エンディング

ミラ 「ねえアルマ、お願い事決まった？」

アルマ 「・・・お星さまはロボットのお願いも叶えてくれるかな？」

ミラ 「うん！きつと叶えてくれる！」

私はね、来年はアルマと、友達と、みんなで一緒に星を見れますようにってお願いするんだー。」

アルマ 「みんなで、一緒に！ ボクは・・・。」

ボクは・・・みんなと友達になりたい。

だから、お願いするのは・・・。

お星さま、お星さま。ボクのお願いを聞いてください。

“友達になりたい”

そう言える、ボクになれますように。